

教職員・幼児児童生徒・保護者を応援します！

# サポート

No. 210

令和7年10月31日発行

県教育庁特別支援教育課指導チーム

## 第24回秋田県特別支援学校総合体育大会 ～みんなかがやけ！ えがおあふれる このしゅんかん～

第24回秋田県特別支援学校総合体育大会が、9月12日（金）に秋田県立中央公園スポーツゾーン、県立体育館、あきた総合支援エリアを会場に開催されました。さわやかな青い空が広がる秋晴れの中、特別支援学校15校、中学校特別支援学級6校から1,093名が参加し、各会場で熱戦が繰り広げられました。勝利を目指して仲間と共に最後まで競技し、一人一人がきらりと輝く姿は、大きな感動を与えてくれました。団体競技の結果を報告します。

バスケットボール	男子	1位 栗田支援学校	2位 能代支援学校
	女子	1位 能代支援学校	2位 ゆり支援学校
ネオホッケー		1位 稲川支援学校	2位 比内支援学校かづの校
グラウンド・ゴルフ	小・中の部	1位 由利本荘市合同 (特別支援学級)	2位 にかほA (特別支援学級)
	高の部	1位 大曲支援学校せんぼく校	2位 ゆり支援学校
ピン倒しボール	小の部	1位 栗田支援学校A	2位 天王みどり学園A
	中の部	1位 天王みどり学園B	2位 ゆり支援学校A
	高の部	1位 ゆり支援学校A	2位 栗田支援学校A
	HOME	1位 視覚支援学校	2位 比内支援学校たかのす校A
サッカー		1位 栗田支援学校	2位 ゆり支援学校
ボッチャ	OP小中	1位 ゆり支援学校B	2位 横手支援学校B
	OP高	1位 きらり支援学校A	2位 ゆり支援学校B

### 大会の様子



グラウンドゴルフ



ボッチャ



ネオホッケー



サッカー



バスケットボール



ピン倒しボール



フライングディスク

(特別支援教育課 指導主事 山田 賢子)

## 令和7年度 高等学校特別支援教育コーディネーター連絡協議会

高等学校の特別支援教育コーディネーターによる実践発表や協議などを通し、校種間・学校間及び関係機関との連携の推進を図ることを目的として、7月29日（火）にオンラインで開催しました。県内の高等学校から55名の特別支援教育コーディネーターが参加しました。

高校教育課と特別支援教育課からは、「個別の教育支援計画を活用した関係機関との連携・引継ぎ」について説明しました。進学や就労に係る引継ぎと連携のポイントとして、「①校内支援体制の整備、②いつ引継ぎ・連携を行うのか、③誰が引き継ぐのか、④何を引き継ぐのか」の4点を挙げ、年間計画の中で意識しながら取組を進めてほしいと伝えました。

また、「特別な支援を必要とする生徒の進路指導等の成果と課題について」をテーマに、3校から実践発表をしていただきました。発表内容を紹介しますので、取組の参考にしてください。

### 「支援を必要とする生徒の大学進学に向けたサポート体制」大館鳳鳴高等学校

- ・中学校からの申し送りや保護者からの情報提供を基に、組織的な支援を行うことができた。
- ・入学時から情報交換会を毎月実施し、生徒の様子や支援方法等を共有することにより、医療機関への接続や大学受験に当たっての合理的配慮申請を円滑に行うことができた。
- ・学校における諸活動の中で成功体験を積み重ねていくことにより、自己肯定感が高まるとともに、生徒本人が自らの特性を理解しようとする前向きな姿勢につながった。また、進学後を見据えた取組の中で、他者に必要な助けを求めることの大切さを学んだ。

【キーワード】 中学校からの引継ぎ、校内での組織的な支援、生徒の成功体験の積み重ね

### 「秋田きらり支援学校との連携による学習支援」由利高等学校

- ・入院予定のある生徒と保護者から「病弱教育サポートセンターきらり☆」の利用希望があった。
- ・秋田きらり支援学校と連携し、具体的な支援方法等について助言をもらった。担任を中心にやり取りを進め、本人が求める具体的な支援について実現可能な方法を校内で検討した。
- ・「病弱教育サポートセンターきらり☆」の利用により、生徒の学習の遅れへの不安が解消し、退院後の復帰がスムーズにできた。一方、通信環境や日程の調整には課題が残った。



病弱教育サポートセンターきらり☆  
リーフレット

【キーワード】 特別支援学校のセンター的機能の活用、支援方法の校内検討、学習の遅れへの不安解消

### 「本校における取組」羽後高等学校

- ・挨拶、整理整頓やスケジュール管理、係活動での役割等、日々の集団生活を通して社会性が身に付くようにしている。
- ・困りごとがあった場合、教師に気軽に報告・相談するよう伝えるとともに、相談しやすい環境づくりに努め、生徒の心理的安全性を高める取組を進めている。
- ・進路探究「羽後学」での就労体験、各コースにおける体験活動の充実を図り、他者との関わりを通してソーシャルスキルやコミュニケーション能力を育成している。

【キーワード】 集団生活を通じた社会性の育成、相談しやすい環境づくり、体験活動の充実

(高校教育課 指導主事 伊藤 真子)

## 「地域が教室 はじめの会」～大曲支援学校せんぼく校～

大曲支援学校せんぼく校は、今年度で、開校から10年目を迎えました。開校当初から、「地域が教室～地域と関わり、本物の体験から学ぶ～」を教育活動のテーマとし、社会に開かれた教育課程の実現と特色ある教育活動の展開を目指して取り組んでおります。今年度の学校運営の重点には、「『地域が教室全体計画』に基づく地域の意見を反映させた学校づくり」を掲げています。その取組の一つである、「地域が教室 はじめの会」について紹介します。

「地域が教室 はじめの会」は、毎年5月下旬頃、学習に関わりのある地域の方、行政及び福祉関係者、卒業生及び在校生保護者等を学校に招き、毎回20名程の参加をいただいている取組です。主な内容は、学校見学、児童生徒の「『地域が教室』に関する学習をするためにお願いしたいことや教えてほしいこと」の発表、参加者同士でのグループ協議（語り場）等です。昨年度から、グループ協議に高等部生徒も数名参加しています。さらに、今年度は、参加者の方々に、各学部の授業に実際に参加していただき、普段の児童生徒の様子や、学習の内容等を知っていただく時間を設けました。授業に参加した方からは、「児童が人を受け入れていることが、大変良い。思いやりの気持ちが育っている。」「観光科は、将来につながる学習をしていると思う。」等、目指す児童生徒像や教育課程に関連する貴重な感想をいただきました。また、グループ協議では、「作業学習の体験はおもしろかった。学校祭等、他の機会にもできるとよい。」「作業学習製品の販売場所を探しているとのことだったが、市役所や病院はどうか。」等、具体的なアドバイスもしていただきました。実際に、高等部では、作業学習製品販売の販路を広げ、地域の方々からご好評をいただき、生徒たちの自己有用感の醸成や地域の理解推進にもつながっています。

この取組を通して、せんぼく校の子どもを中心とした輪が大きく、そして、強いものになっていくよう、地域の方々の声や力を大切にしながら、取り組んでいきたいと考えております。

(大曲支援学校せんぼく校 教諭 能登谷 明子)



【参加者によるグループ協議（語り場）の様子】



【授業参加（高等部「観光科」）の様子】

### お知らせ

#### 「秋田県特別支援学校就労促進フェア」の開催について

内 容：「夢の実現に向けて」～就労を目指す生徒の実践発表～、技能競技会（ビルクリーニング、喫茶サービス、縫製、ワード・プロセッサ）、作業学習製品展示・販売等

参観対象：特別支援学級の児童生徒、保護者、教員、地域の方、企業の方等  
申 込 み：不要。短時間でもお気軽にご来場ください。

県北地区	11月28日（金）9：20～14：00	能代山本交流センター
県央地区	12月16日（火）9：20～14：00	栗田支援学校
県南地区	12月12日（金）9：20～14：00	角館交流センター



美の国あきた  
特別支援教育課 web サイト

## インクルーシブの風

このコーナーでは、インクルーシブ教育システムの推進の観点から、各種等における特別支援教育に関する取組や交流及び共同学習の様子などを紹介していきます。

「特別支援学級実践研修」は、提示授業に基づく協議等を実施することにより、特別支援学級担任の実践的指導力の向上を図る研修です。今回は、仙北市立生保内小学校の特別支援学級実践研修を紹介します。

### 「わたり」※による指導の工夫 ～仙北市立生保内小学校の算数科の実践～

仙北市立生保内小学校 知的障害特別支援学級（1年生1名、3年生2名）の算数科の実践は、「つり大会のデータを分かりやすく整理しよう！」という単元名で、特別支援学級内で行った「つり大会」の結果を教材にしたものでした。研究協議会で話題になったことを紹介します。

※「わたり」：特別支援学級等で、直接指導を行うために、複数の学年を移動する教師の動き

#### ① 一人でもできる学習課題

授業の開始時は、3年生2名に直接指導を行うため、1年生には、学習内容表（学習の流れの表）を提示し、復習のプリントに取り組む学習を用意しました。

プリントには、個数の大小を比べたり、個数を読み取ったりすることができるように、数字を図に置き換え、絵グラフに色を塗って数の大小を比較するなど、一人でも学習を進められるための工夫がされていました。



【ワークシートでの学習】

#### ② 学習環境の設定

1年生が課題に取り組んでいる間、教師と3年生の2名は、ホワイトボードに掲示された手順表を使って本時の学習内容を確認し、教師が1年生の指導に移動しても、3年生の2名それぞれが表の値を計算したり、その結果を見合って確認したりできる時間配分の工夫がされていました。

また、衝立で教室を仕切り、物の配置を児童の動線に沿って整理しているなど、児童が集中して学習でき、教師がその様子を見取ることができる環境設定の工夫がありました。



【衝立で仕切った教室】

#### ③ 児童の思考を促す教材・発問

3年生には、表や棒グラフの特徴を読み取ることができるように、表の数字が見やすく、計算しやすいように色分けされていました。話すことが苦手な2名に対して、必要に応じて気付きを促す発問をしたり、思考している姿を静かに見守ったりすることで、児童の活発なやりとりが見られました。



【対話による学習】

#### ④ 互いの頑張りを認め合う場面設定

授業のまとめでは、3名の児童がそれぞれの学習の成果を見合う場面があり、どの児童も教師の質問に対して自分なりに答えようと思しながら、互いの頑張りを認め合うことができていました。児童らが45分間学びに向かう姿を見て、参観していた先生方からは、「通常の学級でも取り入れられそうなヒントがあった。なるほどと思った。」などの感想が多くありました。



【学習成果を見合う様子】

3名の児童の得意なこと、苦手なことの実態把握が的確であるからこそ、1・3年生の一人一人の児童に合った学習が展開され、「できる」「わかる」「やってみたい」という学ぶ意欲が児童の表情や発言にも表れていた、子ども主体の授業実践でした。

（南教育事務所仙北出張所 指導主事 石川 裕子）